

映画

の中の

子ども
たち

第20回 真夜中のゆりかご

—実 は 母 たち の 物 語—

川崎 二三彦

児童虐待

児童虐待がテーマというわけではないが、虐待問題が登場するらしいと聞いて出かけて観たのが本作品。2014年のデンマーク映画である。

のっけからだ。「ヤクの捜査だ」と、アパートの一室に刑事2人が踏み込むと、DVがらみの夫婦喧嘩が佳境を迎えており、刑事に驚いた夫がわめき散らす。

「オマエが呼んだのか！」

妻は激しく否定し、咄嗟に彼らを締め出してしまった。「ああ、これじゃ殴られる」などと心配したものの、なるほどDVとはかくあらんと思わせる描写だろう。

刑事はドアを蹴破って再び突入するが、奥の部屋を覗いて思わず顔を背ける。そこには、生まれたばかりの赤ちゃんが、糞尿にまみれて泣いていたのである。

「福祉課に連絡だ！」

映画はこうして始まり、子どもは保護され夫婦は連行される。誰が考えても納得できる展開だ。ただし、私が虐待問題にかかざらわっているせいかどうか、その後の流れに引っかかって物語に乗り遅れてしまった。というのも、ヤクが検出されなくて夫婦が釈放されたのはいいとして、例のベビーもすぐに彼らの元へ返されたからである。



「かなり重篤なネグレクトじゃないか。デンマークでは、これでも親に引き渡すのかい？」

「一度、この国の虐待対応システムについて調べなくちゃ」

などと、ああでもない、こうでもないと思案しているうちに、物語は私を置き去りにしてどんどん進んで行ったのである。何しろ本作は、これだけのDV・虐待・ネグレクトがある夫婦に子どもが返されてはじめて成立する仕立てなのだから、いかんともし難い。

突然死

さて、こんな捕り物を続けている敏腕刑事も、帰宅すれば愛すると妻と生まれたばかりの赤ちゃんが待っている善良な夫であり、父である。ただし、愛くるしいベビーは夜泣きが激しく妻は疲れ気味。それを気遣って、夫は懸命にベビーをあやし、泣き止むまで車に乗せて深夜の街をドライブするなど、かいがいしく働くのである。

そんなある朝のこと。なぜか子どもが息をしておらず、それに気づいた妻が絶叫し、錯乱する。

駆け寄った夫が救急車を呼ぼうとすると、今度は一転、妻は凄まじい形相で拒絶する。

「イヤ! 電話したら、私は死ぬ!!」

「子どもはもう死んでるんだよ」

ははあ、この映画、ネグレクトの次は「突然死」なんだ。今の私の職場じゃ珍しくもない、食傷気味の話かい? などと思っていたら、物語は、あつというまに核心に向かって突っ走る。

「遺体とこの子をすり替えてきた」

刑事の決断だ。

2組の親子は、ここへきて大きく交錯するのである。

特殊の中にある普遍

さて、実の親から子どもが切り離さ

れることで生じる悲喜こもごもの映画は無数にあり、本連載でもいくつか取り上げた。たとえば「八日目の蟬」は、誘拐犯が子育てをするという設定だったし、「もうひとりの息子」は、2組の夫婦の子どもが取り違えられる話だ。すると本作は、両者を足して2で割ったようなものかも……。

それにしても、どうしてまた、こんな特殊な設定をしなければならないのか。物語世界に入りそびれながら考えていて、はっと気づいたことがある。それは、特殊な状況だからこそ、普遍的な姿を浮き彫りにすることができるということだ。

「愛する子どもを失ったのに、この上、妻にまで死なれてなるものか」と思いつめた刑事の、前後を失い常軌を逸した行動に妻はどう反応するのか。固唾をのんで見ていた私は、不条理に納得せず困惑する彼女の言動に、ある意味、胸をなで下ろしたのだが、もう一組の夫婦の反応も、なるほどと思える内容だった。何しろ、朝起きてみたら、息絶えた子どもがそこにいるのである。薬物依存のDV男は、預かり知らぬ乳児虐待で逮捕、拘留されるなんてまっぴらだと罪を免れるべく奔走するのだが、パートナーの母は、瞬時に一つの確信を得て、「あの子は生きています」と口走る。

「馬鹿もん、死んでるじゃないか！」
 「死ねば、顔つきだって変わるんだ」
 夫はぐだぐだ言う妻を尻目に死体を遺棄し、狂言芝居を打つのだが、彼女は、それを茫然と拱手傍観する。

＊

気がつくと、私もこのあたりから次第に映画の世界に入り込んでいた。

「あんな夫婦に育てられるより絶対幸せだ」と刑事の夫に説得され、戸惑いながらも母乳を与える妻。だが、ある夜彼女は、子どもを乗せたベビーカーを道路の真ん中に置いて通りかかった車を止め、ドライバーに必死の思いで掛け合うのであった。他方、DV男の妻は、逮捕されても「あの子は死んでいない」と繰り返し、挙げ句、病院に送られる。

では普遍性とは何か。簡単に言えば、男は問題解決に奔走し、女は感情に身



をさらすということだ。

まだ映画を見ていない人のために、ここで結末を書くわけにはいかないが、短絡、保身、浅知恵、もしくはそれら全てが当てはまると思える男の行動とは対照的に、生死を問わず子どもと分離された母たちは、否応なく湧き起こる自らの感情に抵抗などしない。結果、激しく翻弄されて破局を迎えもすれば、思いもかけず強くもなるのである。女性監督だからというわけでもないのだろうが、本作は、対照的な2人の女性に対照的な結末を用意しつつ、そうした母の姿を表現させている点で納得させられるものであった。それにしても、男が気づくのは、いつも遅すぎる。

なお、本作は最後に再びある種の児童虐待を登場させることで、完結するということも付け加えておこう。

＊ 2014 / デンマーク

＊ 鑑賞データ 2015/05/24 TOHO シネマズ 二条

＊ 公式 HP <http://www.yurikago-movie.com/>

＊ Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/38779>

第1回	プレシャス	* 題名を click すると本文へ ジャンプします。
第2回	クロッシング	
第3回	冬の小鸟	
第4回	その街の子ども	
第5回	八日目の蟬	
第6回	いのちの子ども	
第7回	ラビット・ホール	
第8回	サラの鍵	
第9回	少年と自転車	
第10回	オレンジと太陽	
第11回	孤独なツバメたち	
第12回	明日の空の向こうに	
第13回	旅立ちの鳥唄	
第14回	くちづけ	
第15回	もうひとりの息子	
第16回	メイジーの瞳	
第17回	ファイ	
第18回	思い出のマーニー	
第19回	ショートターム	